

地域を志向した研究 (N)

自由課題: 医療通訳への入り口としてのお話しボランティア-外国人入院患者のストレス緩和を指して-

代表研究者: 看護学部・講師・前野真由美

共同研究者: 国際関係学部・准教授・高畑幸, 静岡済生会総合病院・地域医療センター室長・岩崎圭介, 常葉大学・健康科学部・准教授・前野竜太郎, 看護学部・講師・濱井妙子, 短期大学部・准教授・副島里美, 国際関係学部・准教授・水野かほる, 静岡県国際交流協会・総務課長・加山勤子

【地域の課題】 医療通訳者が少ないです。日本語の理解が難しい外国人入院患者さんがいます。通訳者は病院の環境に慣れていません。**【研究内容】** 外国人患者さんのところに通訳者、医療者 (=退職者) の2人で行き、「お話しボランティア」活動をし、外国人患者さんの入院によるストレスを和らげることを目指しました。また、「お話しボランティア」活動が医療通訳の入り口になるのか、ワークショップを行いました。**【研究結果】** 「お話しボランティア」活動によって、外国人入院患者さんのストレスは緩和しました。また、通訳者のストレスも緩和しました。ワークショップの結果から、「お話しボランティア」は医療通訳の入り口に繋がると考えます。**【今後の展開】** 医療通訳に関心ある通訳者への支援の継続に努めます。通訳者が病院に慣れるよう、病院内の通訳者の活動の協力をお願いいたします。



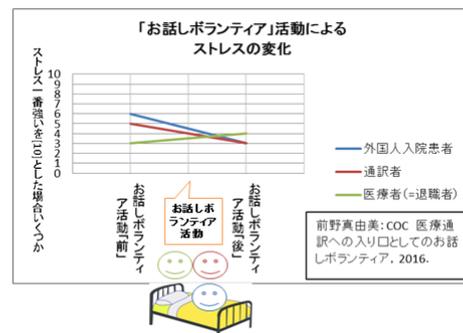
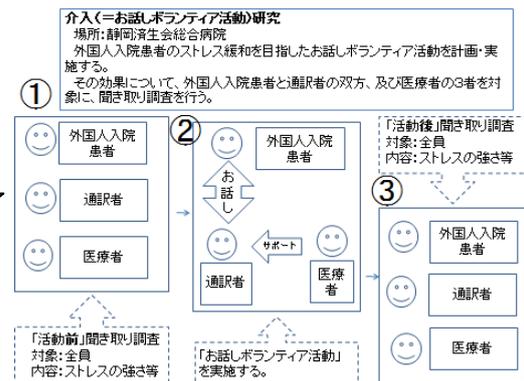
第1回ワークショップ「医療通訳の入り口としてのお話しボランティア - 外国人入院患者のストレス緩和」

平成 29年 1月 29日 (日) 参加者 14名。外国人、通訳者、医療者、外国人支援者、大学教員。「お話しボランティアは医療通訳に繋がる」と答えた者は 6名 (42.9%)



第2回ワークショップ「自分の住む地域の外国人医療のこと」

平成 30年 1月 28日 (日) 参加者 17名。通訳者、医療者、支援者、大学教員、大学生。「お話しボランティアは医療通訳に繋がる」は 12名 (70.6%)。



外国人入院患者のストレス緩和を目指す「お話しボランティア活動」研究 平成 29年 3月 場所: 静岡済生会総合病院 結果: 外国人入院患者、通訳者のストレスは軽減した。一方、医療者のストレスは増加した。医療者は、患者と通訳者と会話中の役割に困ったそうです。活動後、家族、病院の医療者、全員に笑顔がみられた。

